



がっ ど い りん ぽ か ん
6月 土居隣保館カレンダー



にち 日	げつ 月	か 火	すい 水	もく 木	きん 金	ど 土
1	2	3 うんえいしんぎかい 運営審議会 19:00～	4	5 ｽｰﾌﾟﾌﾞｯｸ 10:00～ しゅうがくぜんぶかい 就学前部会 16:00～	6	7
8 じんたいきょうそうかい 人対協総会 (川之江隣保館)	9	10	11 ねんせい 6年生 こうりゅうかい 交流会 14:00～	12	13	14
15	16 りんぽかんけんがく 隣保館見学 (長津小学校) 10:00～	17	18 じんけんざだんかい 人権座談会 18:30～	19 ｽｰﾌﾟﾌﾞｯｸ 10:00～	20	21
22	23 クラフト バンド教室 10:00～	24	25	26 しこくブロック 四国ブロック りんぽかん 女性 隣保館 女性 しよくいんけんしゅう 職員研修	27 しこくブロック 四国ブロック りんぽかん 女性 隣保館 女性 しよくいんけんしゅう 職員研修	28 もっこうきょうしつ 木工教室 10:00～
29	30					

こ じんけん
○子どもの人権について

こ じんけん みじゆく とくべつ はいりょ ほ こ ひつよう
子どもは心身ともに未熟なため、特別な配慮や保護が必要です。しかし、子どもも

おとな おな ひとり にんげん さまざま けんり も
大人と同じように一人の人間として様々な権利を持っています。子どもであることを

りゆう じんけん しんがい こ まも わたし おとな せきにん
理由に人権を侵害されることのないよう子どもを守ることは、私 たち大人の責任で

す。

ど い りん ぽ か ん だ よ
土居隣保館便り

はっこう ど いりんぽかん
発行:土居隣保館

どいちょうふじわら
〒799-0703 土居町藤原5-400-3 TEL/FAX 28-6356

ねん
2025年
がっごう
6月号

くもよお前は一夜のうちに
どこへでもきれいな棲家を造るね
私にもお前のまねが出来ると嬉しいな
春は花咲く緑の野辺に
夏は涼しい瀬戸の岸辺に
秋は静かな紅葉の里に
それぞれの形変わりし家を建て
その家を長い廊下で結び
誰にも叱られずのびのびと
一年にただの三日でも良い

出典「荊を越えて」江口いと

くも
蜘蛛

子供会の子供達に
おいしいお弁当をどっさり持たせ
思うさま遊ばせてやりたい
子供達は喜ぶだろうなあ
私は自分の思う事は出来ないが
くもよお前は私より伶俐だなあ

この詩から、常に子どもたちのことを考えていた、いとさんの優しさが伝わってきます。また、おなか一杯食えることもままならない、遊ぶことさえ制限されてしまう差別の現実が見えてきます。この現実から目を背けず前に進んでいきます。主事 高橋建太郎



江口いとさんは、人権活動家であり詩人です。家族や自身が受けた

差別体験をもとに、詩や講演を通じて、部落差別の不条理さ人権の大切

さを訴え続けました。講演は40年間にわたり約3,000回にもおよびま

す。いとさんの詩や活動は現在も人権教育の現場で取り上げられ、その

思いは今も多くの人々に受け継がれています。

幼少期

いとさんは、1912年に小さな漁村で生まれました。父親はいとさんが7歳の時に亡

くなりましたが、母親や兄や姉に守られ、優しさや感謝の気持ちを大切にしながら成長

していきました。

結婚と別れ

いとさんは20歳の時に同じ村のまじめで優しい青年と結婚しました。そして2人の子

どもが生まれ、夫と協力しながら生活していました。

しかし、1943年、長男が1歳2か月、妹が生まれて45日のとき、夫に召集

令状が届きました。その後、いとさんは子どもたちのために精一杯働きました。家には

五反ほどの畑と船・たくさんの網がありました。いとさんは知人に頼み、漁業を始めま

した。夕方に網を入れ、次の日の朝3時に引き上げ、昼間は網の修繕もしました。戦地の

夫の苦労を偲び、「何のこれしきの事」と仕事に精を出し、夫の帰りを待ちました。

1945年8月。終戦となり、近所の人々が帰ってくるようになりました。いとさんも

夫の帰りを今日か明日かと待ち続けましたが、1948年2月。戦死が伝えられました。

汽車来れば父ちゃん来ると旗を振る吾子の姿を夫に見せたき「荊を越えて」より

病床に臥す

夫を亡くした悲しみに追いうちをかけるように、台風で畑が流されました。さらに、

母も病気で亡くなりました。

度重なる悲しみと仕事の無理があり、いとさんは病床に臥してしまいました。

今のような福祉制度はありませんでした。いとさんは子どもを育てるために、船も網も

売りました。最後に何一つ売るものがなくなった時、小学1年と2年の子どもが学校か

ら帰ったあと、あめやお菓子を売り歩いて、いとさんの薬代を作ってくれました。

子を思い決心

戦後間もない頃、誰もが生きていくことに精一杯だった時代、夫を亡くしたいとさん

は誰に頼る事も無く、子どもたちのために何とかして生きようと考えました。二、三歩

ずつ歩く練習を始めるなどして、病気と闘いダメだと言われていた病気が全快し、

病床を離れることができたのは1950年の10月でした。

この時いとさんは「子どもたちが大きくなった時、人と人が手をつなぎ、いたわりあっ

て生きていく世の中を作りたい」と決心しました。

そして、自分自身が何かしなければと、行動を起こしました。

この子らの世には栄えよ悲しみの我が半生をかけてつくさむ（いとさん 38歳秋）

「荊を越えて」より

つづきは 土居隣保館便り 7月号で掲載します。

「生きることとは」～江口いとさんの生涯～

8月末ころから江口いとさんの生涯を紹介する企画展示会を開催します。

今一度部落差別の原点を見つめ直す機会になれば嬉しいです。